中近世日本語心情表現の応用と転換　―もじりの史的心性学―

M・リュッターマン

1. 心情とは、そして恐れとは

この講演では、心情概念とりわけ「恐怖」（心配・不安・恐れ...懼・危懼・危惧）に注目し、日本の中近世を中心にその表現について考えたい。少し硬い言い方では「言語化」「概念化」の問題である。言語史や文化比較も視野に入れて、例えば英語の“anxious”（独語の eng, Angst、サンスクリットの *aṃhas, aghá*）と日本語の「心細い」の類似、またムンクの『叫び』（Skrik）を例に絵画における恐怖の表象についても思弁する。文学ならば宮沢賢治の『注文の多い料理店』における擬態や比喩といった表現が注目され、ほかにも映画や歌劇などのメディアにも連想は広がる。

2. 心情を「概念化」（理性化、議論）すること

「概念化」の歴史をひもとけば、古代中国には「五情」・「五根」（『倶舎論』）および「懼」をも含む「七情」（『礼記』「礼運」）があり、古代ギリシャの歴史記述ならトゥキュディデスの『ペロポネソス戦争史』で出来事の因果に「恐怖」フォーボス phóbos が明記され、アウグスティヌスはティモール　*timor*（神の愛に背く心配）を説いた。近代西洋哲学や心理学はセーレン・キルケゴール著『不安の概念』、マルティン・ハイデッガー著『存在と時間』などをはじめ、ウィリアム・ジェームスのエッセイ『エモーションとは何か』をへてジークムント・フロイト著『制止，症状，不安』に至る。

近代社会史学ではフロイトの『文化においての違和感』（または『文化への不満』）をうけて、例えばノルベルト・エリアス著『文明化の過程』の初歩的研究などで心情の抑制・消化・代行の長い変容が分析されている。恐怖との絡みで再検討に値する次元を提唱するとともに、立ち居振る舞いの厳しい躾や、作法による抑制の作用（心配や違和感）についても考えたい。

3. 心情の「修辞化」（日本語史料の世界を例に）

上述の躾・作法に沿った問題設定から、中世の日本語史料を見よう。南北朝・室町時代の書で『書札礼［付故實］』の条目では、書札の礼儀について正誤を峻別しようとしても判断し兼ねる躊躇いを「思煩之時」と呼ぶ。別書『書札作法抄』ではこの拘りを「書札煩ハシキ」ことと称している。江戸時代に入っても筆法を守らなければ 「おそれがまし」といわれ、筆跡こそは妬むほどである。「鬼の眼をつぶしかけたるやうなる」程の作用として描写。妬みか、悔しさか、恐れか。あるいは 「むかしの光明皇后中将姫も爪をくわへ給ふ遍記ハ傾城の手」と書かれる（『女重宝記』）。

ちなみに、筆法と書札礼のみならず、そもそも修辞において恐れの類語は多く、挨拶（「恐惶謹言」・「恐々謹言」・「かしこ」・「かしく」）、推測（「おそらくは」）、また「恐れ入ります」・「誠に恐縮ですが…」・「かしこまりました」（謝意・了承・依頼）など人間関係を円滑に運ぶ方便としての“恐れ”表現に馴染みのない者はいないだろう。この慣習は漢時代の帝の御前の言葉遣い（『独断』）などに由来し、奈良時代から日本に伝わり平安時代以降和訳もされた。つまりは、もともとなかった使い方が中国の使用法に影響され、挨拶用語にも採用された。「女の文の書くかしくは恐惶なり」（荻生徂徠『南留別志』）など、近世の作法書もさように説明している。

書簡や書礼書を見ながら、書き留めの「恐惶謹言」・「恐々謹言」・「かしこ」の普及を確認したい。恐れ恐れ、この文句の響きは心情なのか、型になった無意味の音に化したのか。いや、何らかの残影はあるかも知れないが、とにかくこの残影の厳かな気分は特殊なものだと言えよう。地球上でそれほど普遍的ではなく、日本語社交においてもやや違和感がのこるのではないか。

4. 《心情修辞》の変容、その「風刺」的、「模擬」的展開

『文のたより』（江戸時代末期）など女文章や廓案内の冊子をはじめ、近世の消息表現でめだつのは「めでたく かしこ」という組み合わせ。これも古文の表現だが、高山寺に伝わった「古往来」にも「恐悦兼深」（きょうえつかねてふかし）、「恐悦〻〻」（きょうえつきょうえつ）（「悚悦〻〻」（しょうえつしょうえつ）、などとある。書き留めではないが、おおむね感謝の念（有難い、ありがと

う）の意味で使われている。中国ではまず言わないと思うが如何。やはり和訳を以って、挨拶の響を明るくしようとした動向だろうか。したがって、「めでたし」と「かしこむ」を一句に収めた書き留めは奇妙な感じもする。しかし近世にはいって大変人気を得たことは周知の通り。奇妙のあまりか、浮世絵（錦絵）など、花魁が寒山拾得の一体化になり、お経が懸想文に転じて、捩られる。あるいは禿（かむろ）の袖皺模様としてもパロディ的に表象（奥村政信）。恐怖と遊んでいる。固苦しさへの抵抗を表現しているのかもしれない。事実、「かしこ」・「かしく」を「可祝」と書く習わしすらある。たとえば筆まめの鈴木牧之の書簡に「可祝」と書き留められているものがある。『［新増］女諸禮綾錦』巻三（女諸通用文章）などで、「かしく」の表現につき、「可祝」の字義を彷彿するため、弔い状などにそぐわない表現であるという俗説を退け、原義は「祝」にあらずと解説されている。一方、江戸時代末期にいたって文字応用の普及がかなり進んでいた模様。

最後に、かわら版に掲載された鯰絵と仮名文を見たい。安政大地震の直後の世直しに出現したもの。鯰乗りの遊女は「苦艱菩薩像」（くげんぼさつぞう）と名付けられ、象や鳳に乗る菩薩に準えられる。光背もまた、和歌の月の表象に転じている。文章も遊女懸想文を捩ったものだが、たとえば文末の「身仕多（た）く　の　じく」［= 身支度の字句］という書き留めは柔らかい和訳の「めでたくかしく」を言葉捩りしているばかりではなく、その仮名の「散らし」も文字配置まで似通わせている。つまりは苦痛を払い、心配・恐怖の気分と正反対に陽気の心延えをおこすのか。

やはり、比喩・風刺の表象の意義を考えるに、カタルシス *katharsis*（社交にて担い手心中の緊張がほぐれること）が思い浮かぶ。近世演芸や文学、版画などの滑稽風潮が諸々の制限や圧力に対して大祓を表した意味であろうか。かかる「恐怖」の捩りや言葉遊びが儀礼句の含意する緊張・違和感から解放された笑いと理解したいものだ。

参考文献

修辞の要素については拙論参照（二〇〇四「日本語修辞の挨拶用語に於ける『恐怖』ー礼儀の一面をめぐる史的考察の試みー」『日本研究』第２８号、１３ー４６頁）。

瓦版の話は独語の拙論あり（二〇〇四、“Ein kana-Brief im Ziegeldruck”, in: Judit Arokay

u. Klaus Vollmer (Hg.): *Sünden des Worts. Festschrift für Roland Schneider zum 65. Geburtstag,* Hamburg: OAG (MOAG; Bd. 141), pp. 289-98)。
笑い・滑稽とカタルシスとの関連については
フロイト著『機知 ー その無意識との関係』 (一九〇五)、フロイト『ユーモア』(一九二七) 、
NETTO, Curt / WAGENER Gottfried 1901 *Japanischer Humor.* F. A. Brockhaus などを参照。

心情の心理学と行動学

de Waal, Frans 1990 *Peacemaking Among Primates.* Harvard Univ. Press
Dretske, Fred 1988 *Explaining Behavior. Reason in a World of Causes.* Cambridge, Mass, London: MIT Press
(水本正晴[訳] 『行動. を説明する ― 因果の世界における理由』 [双書現代哲学 1] 勁草書房 二〇〇五)
Eibl-Eibesfeldt, Irenäus [4]1997 *Die Biologie des menschlichen Verhaltens. Grundriß der Humanethologie*. München u. Zürich: Piper (桃木暁子、 日高敏隆 [訳] 『ヒューマン・エソロジ ー 人間行動の生物学』ミネルヴァ書房 二〇〇一)
Føllesdal, Dagfinn 1994 "Husserl's Notion of Intentionality," John Macnamara et Gonzalo E. Reyes (eds.) *The Logical Foundations of Cognition.* Oxford University Press, pp. 296-308
Freud, Sigmund 1953 *Abriß der Psychoanalyse. Das Unbehagen in der Kultur*. Frankfurt a.M.: Fischer
中山 元 [訳] 『幻想. の未来／文化への不満』 光文社古典新訳文庫、光文社 二〇〇七
Freud, Sigmund 1926 *Hemmung, Symptom und Angst.* Wien : Internationaler Psychoanalytischer Verlag
加藤敏, 石田雄一, 大宮勘一郎 [訳] 『 フロイト全集 19』(「否定 ; 制止, 症状, 不安」; 「素人分析の問題」: 1925-28 年) 岩波書店 二〇一〇
Tomasello, Michael 1999 *Origins of Human Communication.* Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Press

心情の史的研究

森田直子 二〇一六「感情史を考える」『史学雑誌』一二五 (三)、三十九〜五十七頁
森田直子 二〇二〇「歴史学は感情をどう扱うのか ー 罵りをめぐる感情史の一試論」『エモー

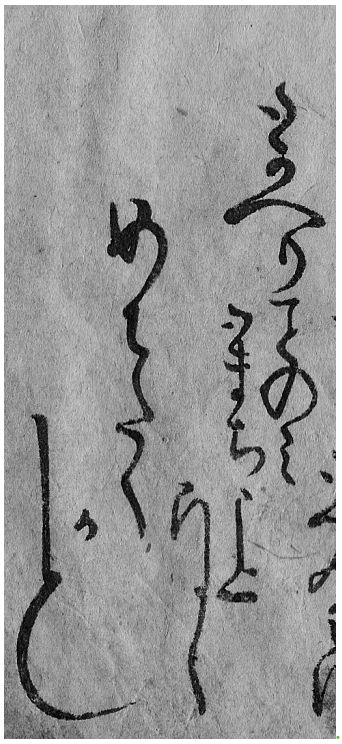
ション・スタディーズ』五（一）、四十五〜五十五頁
Althoff, Gerd 2000 "Gefühle in der öffentlichen Kommunikation des Mittelalters," Benthien et al. (eds.) 2000, pp. 82-99
Benthien, Claudia; Anne Fleig; Ingrid Kasten (eds.) 2000 *Emotionalität. Zur Geschichte der Gefühle.* Köln: Böhlau
Boddice, Rob 2017 *The History of Emotions (Historical Approaches)*. Manchester Univ. Press
Boquet, Damien et Piroska Nagy 2015 *Sensible Moyen Âge: Une histoire des émotions dans l' Occident medieval.* Paris: Éditions du Seuil [trans. by Robert Shaw, *Medieval Sensibilities: A History of Emotions in the Middle Ages.* Medford, Mass.: Polity Press 2018]
Dinzelbacher, Peter 1992 "Emotion," Peter Zawrel (ed.) *Das andere Mittelalter. Emotionen, Rituale und Kontraste.* Krems: Kunsthalle 1992, pp. 101-10
Febvre, Lucien 1941 "La sensibilité et l Histoire," *Annales d' Histoire Sociale* 3e année, N. 3-4, pp. 125-30
Duby, Georges 1988 *Mâle Moyen Âge. De l' amour et autres essais*. Paris: Flammarion
Rosenwein, Barbara H. et Riccardo Cristiani 2018 *What is the History of Emotion?* Cambridge: Polity Press
Stearns, Peter N. et Carol Z. Stearns 1985 "Emotionology: Clarifying the History of Emotions and Emotional Standards", *The American Historical Review*, vol. 90.4, pp. 813-36
Elias, Norbert 1976 *Über den Prozeß der Zivilisation. Soziogenetische und psychogenetische Untersuchungen* (2 vols.). Frankfurt a.M.: Suhrkamp 赤井慧爾, 中村元保、吉田 正勝［訳］『文明化の過程』法政大学出版局 一九八七〜八八
Hansen, Klaus P. (ed.) 1990 *Empfindsamkeiten* (Passauer Interdisziplinäre Kolloquien, vol. 2). Passau: Wissenschaftsverlag R. Rothe
Humar, Marcel 2019 "Antike Emotionstheorien. Philosophische Erklärungen von Emotionen im Kontext der Eudaimonie," Kappelhoff; Bakels et al. 2019, pp. 3-12
Kappelhoff, Hermann; Jan-Hendrik Bakels; Hauke Lehmann; Christina Schmitt (eds.) 2019 *Emotionen. Ein interdisziplinäres Handbuch*. Stuttgart: J.B. Metzler, pp. 3-12
James, Susan 1997 *Passion and Action. The Emotions in Seventeenth-Century Philosophy.* Oxford Univ. Press
Jenkins, Jennifer. M.; Keith Oatley; Nancy L. Stein (eds.) 1998 *Human Emotions. A Reader.* Malden, Mass.: Wiley-Blackwell

恐怖の史的研究

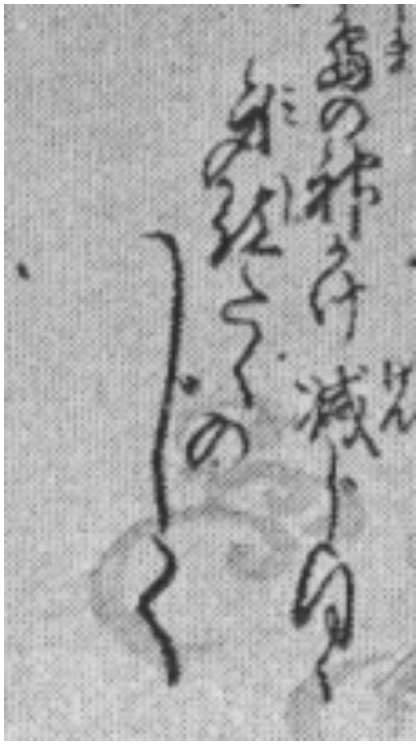
Delumeau, Jean 1983 *Le Péché et la peur. La culpabilisation en Occident (XIIIe-XVIIIe siècles)*. Paris: Fayard （佐野泰雄、江花輝昭［訳］『罪と恐れ ー 西欧における罪責意識の歴史、十三世紀から十八世紀』新評論 二〇〇四）

Delumeau, Jean 1978 *La Peur en Occident (XIVe-XVIIIe siècles). Une cité assiégée.* Paris: Fayard （永見文雄、西沢文昭［訳］『恐怖心の歴史』新評論 一九九七）

戸田山 和久　二〇一六『恐怖の哲学 ー ホラーで人間を読む』ＮＨＫ出版



『文のたより』
（江戸時代末期）



かわら版に掲載された鯰絵と仮名文
（安政大地震の直後）

...　御可へりことのミ御まち申上
　参らせ候
「めで多く　可　しこ」
講演者蔵

...苦艱のほど、鹿島の神かけ［願かけ］
　減じまいらせそろ
「身仕多く　の　じく」［身支度の字句］
中野栄三著『遊女の生活』 雄山閣　一九六五 所収